

第36回新潟画像医学研究会

日 時 平成8年11月30日(土)  
午後2時~6時  
会 場 新潟大学医学部  
有壬記念館

I. 一 般 演 題

1) ルーチン CT から検出された無症状未破裂脳動脈瘤について

登木口 進 (小千谷総合病院  
神経内科)  
岡本浩一郎・古沢 哲哉 (新潟大学放射線科)  
伊藤 寿介 (同 歯学部歯科  
放射線科)  
青木 廣市 (長岡中央総合病院  
脳外科)

脳ドックや MRA の普及により未破裂脳動脈瘤に対する感心が高まっているが、今回当院において日常普通にとられている 5mm sliceCT の読影時に、偶然発見された症例が8例に達したので発表する。診断基準に(1)円形か楕円形、(2)近位の動脈と連続している、(3)近位の動脈より明らかに太い、(4)脳底部の好発部位に一致、(5)造影剤で血管の濃度にそまる、の5条件を用いた。動脈瘤のサイズは全て約6mm以上で、部位はM<sub>1</sub>-M<sub>2</sub> 6例とAcom 2例でIc-Pcには検出されなかった。動脈瘤のサイズに検出能が依存するためと考えた。なお今回の8例中3例にクモ膜下出血の家族歴があった。

2) neuronal migration disorder の IR 画像所見

小田 純一・渡邊 俊明 (国療西新潟中央  
病院放射線科)  
長谷川精一・和知 学 (同 精神科)  
笹川 睦男 (同 小児科)  
来生 陽子・金沢 治 (同 脳外科)  
亀山 茂樹・福多 真史 (同 脳外科)  
伊藤 寿介 (新潟大学歯学部  
歯科放射線科)

gray matter disease の代表的な疾患群である neuronal migration disorder の症例7例に fast IR 法を用いた Inversion recovery (IR) 画像を作成し、その有用性につき検討した。

IR 画像は SE 法による T1 強調画像よりも T1 コントラストが高く、灰白質の白質の分離が明瞭になり、

灰白質の異常を呈するこれらの疾患群の病巣の検出に有用だった。

しかし、このうちの cortical dysplasia の症例のみは病巣の検出能は IR 法よりも FLAIR 法や T2 強調画像の方が優れていた。また、fast IR 法は撮像時間が7分30秒と SE 法による T1 強調画像よりもまだ長い点が問題であり、今後の改善が望まれた。

3) 脊椎硬膜外血腫2例の MRI 所見

西原真美子・斉藤 明 (県立新発田病院  
放射線科)  
梶谷 博也・中禮 康雄  
中台 寛・渡部 和敏  
堂前洋一郎 (同 整形外科)

外科的に確認された脊椎硬膜外血腫の2例の MRI 所見について報告した。症例1は66才女性で脳梗塞の既往があり抗血小板剤を服用していた。平成8年8月16日朝食の準備中突然の項部痛、両肩痛、両上肢のしびれが出現。発症10時間後の頸椎 MRI 検査で C2 から C4 に脊椎管の右背側に腫瘤が存在し sagittal scan で凸型で tapering を示した。血腫内の水分を反映し T1WI で脊髄と等信号、T2WI で高信号であった。T2WI で低信号がみとめられたが clot 内のデオキシヘモグロビンによると考えられた。造影 T1 で硬膜は厚くエンハンスされた。症例2は61才男性、元来健康で基礎疾患は無い。平成8年2月頃から腰部痛、下腿痛が出現。発症3カ月後の腰椎 MRI で L4 から L5 に脊椎管の左背側に硬膜嚢を圧排する腫瘤が認められた。被膜を有し、内部はメトヘモグロビンとヘモジデリンを反映し T1WI, T2WI ともに高信号と低信号部が混在していた。造影 T1WI でエンハンス部分は認められなかった。

4) 平滑筋肉腫治療後に骨肉腫の発現を認めた1症例

加藤 徳紀・小日向謙一  
上野 卓也・山川 智子  
小山 純一・勝良 剛詞  
檜木あゆみ・益子 典子  
中島 俊一・小林富貴子 (新潟大学歯学部  
歯科放射線科)  
林 秀文・伊藤 寿介 (歯科放射線科)

平滑筋肉腫および骨肉腫は顎口腔領域では比較的まれな間葉系腫瘍である。

今回、われわれは側頭下窩を中心とした平滑筋肉腫に対して、化学療法・放射線療法を施行した3年後に下顎骨に骨肉腫の発現をみた珍しい症例を経験したので報告

する。

患者は57歳の女性で、右側下唇部のしびれ感・右側下顎臼歯部の自発痛を主訴に本学口腔外科受診し、生検・CTにて右側側頭下窩を中心とした平滑筋肉腫の診断で、化学療法5クール・外照射66Gyを施工した。

その約3年後に右側下顎骨にCTにて骨形成を伴う軟組織病変を認めため、生検後下顎骨切除術を施行したところ骨肉腫の病理組織診断が得られた。

以上の経過を画像的に検討し、両腫瘍間の関係を考察したところ、初診時にすでに腫瘍は側頭下窩から下顎骨に及んでおり、1つの腫瘍内に平滑筋肉腫・骨肉腫といった複数の組織像を有していたのではないかと考えた。

#### 5) 肺癌 CT 検診12ヶ月の報告

新妻 伸二・真保 禎二  
三上 桂子・佐藤 和美 (新潟県労働衛生  
医学協会)  
山田 一美  
古泉 直也 (新潟大学放射線科)

【目的】肺癌検診にCTが利用され始めているが、当施設でも95年6月より肺癌CT検診を実施している。CT検診は胸部検診の精密検査として行う場合と、本人の希望による肺ドックの2方式である。95年度の胸部撮影件数は検診・ドック合計して43万件で、CTは要精検2,700件中309件に精検を行い25例(7.2%)の高率で肺癌が発見された。一方肺ドックでは2,775例中13例(200人に1人)の肺癌とその他の部位の癌3例が発見された。平面写真で不明が7例、喫煙係数400以下が6例、全腺癌で女性が3例であった。

【結語】現在胃癌検診による癌発見率は500人に1人といわれているが、肺ドックの肺癌発見率は200人に1人であった。平面写真不明が半数と肺ドックCTの効果は絶大であった。

#### 6) 高分解能コンピューター断層撮影での淡い陰影を呈する肺腺癌の鑑別

—小型スリガラス濃度陰影の病理—

古泉 直也・斎藤 友雄  
酒井 邦夫・木原 好則  
松月 由子・森田 哲郎 (新潟大学放射線科)  
薄田 浩幸・内藤 眞 (同 第二病理)  
大和 靖 (同 第二外科)  
江村 巖 (同 附属病院病理部)

肺腺癌の鑑別のため、20mm以下の切除された肺野

限局性スリガラス領域32病変について高分解能CT画像と切除病理組織標本を対比した。肺腺癌(低分化)1病変、細気管支肺胞上皮癌22病変、細気管支肺胞腺腫4病変、炎症性変化5病変であった。組織標本上で消失せずCT上5mm以上であった28病変中27病変が肺癌であり、5mm以上の淡く消失しない病変は、高率に肺癌であり、積極的に病理組織学的検索をすべきであると考えられた。

#### 7) 肝細胞癌に対する経皮的エタノール注入療法後のMRI所見

加村 毅・木村 元政  
関 裕史・尾崎 利郎  
内山 早苗・中山マウロ (新潟大学放射線科)  
酒井 邦夫  
市田 隆文 (同 第三内科)

肝細胞癌に対する経皮的エタノール注入療法(PEIT)後のMRI所見を検討した。PEIT後のMRIが撮像された19例27病変(病変延べ撮像回数29回・PEIT終了からMRI撮像までの期間1~837日)を対象とした。PEIT後の腫瘍近傍のdynamic study早期相での濃染はPEIT終了後1カ月以内で10/14回、1カ月以後は1/15回にみられ、PEIT後早期の所見であった。PEIT後1カ月以内に撮像され経過観察しえた11病変中、再発は7病変、再発なしは4病変であった。再発の予測はT1、T2強調像では困難だったが、dynamic studyでは再発例中2病変にPEIT後1カ月以内の撮像で早期濃染がみられた。1カ月以降の撮像7例中6例が再発例で、dynamic studyでは6例全例で可能だった。

#### 8) 原発性胆汁性肝硬変に認められた肝内腫瘍性病変

見田 有作(新潟大学第三内科)

【症例】59歳、女性。【主訴】肝腫瘍精査。【現病歴】1985年に原発性胆汁性肝硬変(Scheuer I期)と診断され、1989年よりUDCA療法を受けていた。1995年8月の腹部USにて肝左葉に16×12mm大の低エコー腫瘤を指摘され、検査目的に11月7日当科入院した。【検査所見】GOT 38 IU/l, GPT 37 IU/l, AIP 163 IU/l, TB 0.4 mg/dl, AFP 4 ng/ml, PIVKAIⅡ<0.06 AU/ml, CEA 2.0 ng/ml, CA 19-9<2 U/ml, HBs抗原(-), HCV抗体(-)。【画像所見】CTではplainでlow density areaを認め、dynamic studyの早期でiso、後期でlow